

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 大伴家持の防人関係長歌三首の構成とその主題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神宮, 咲希 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001548">https://doi.org/10.57529/00001548</a>

# 大伴家持の防人関係長歌三首の構成とその主題

## The Reason That a Song *Ootomonoyakamochi* Sing Related to *Sakimoriuta* is Sung

神宮 咲希

### 要旨

『万葉集』巻20には、天平勝宝七歳（755）に徴集された防人及び彼らの家族の歌（防人歌）が載る。防人歌は故郷や家族との別離の悲しみを主題とする歌である。これらの防人歌は、当時兵部少輔であった大伴家持によって収集されたのであり、防人派遣の責任者としての任を負っていた家持が、何らかの事情によって防人たちの歌を収集し、記録したのだと考えられる。しかも、この天平勝宝七歳の防人派遣の折には、家持も自ら防人たちの別離の悲しみを主題とした三様の防人関係歌を詠んでいる。こうした歌を家持が詠むことには、『尚書』の「詩言志、歌永言」を始発とし、『古今和歌集』という日本の勅撰和歌集をも成立させる概念として展開した詩の理念が大きく関わっていると考えられる。家持は、この詩の理念の上に成立した「采詩之官」を意識して防人歌を日本の風の歌として収集し、詩大序が説く「上以風化下、下以風刺上」という風の詩歌の理論に基づいて防人関係歌を詠出したのである。つまり家持は、防人歌に応答する防人関係歌を詠むことで、自身が抱く詩の理念の達成を目指したのである。

### 摘要

《万叶集》卷二十收录了天平胜宝七年（七五五年）征集的戍边将士及其家人的和歌（防人歌）。防人歌是以远离故乡和家人而产生的离别之痛为主题的和歌。这些和歌一般认为是时任兵部少辅的大伴家持，在担任戍边将士派遣一职时，因一些事由收集并记录的戍边将士的和歌。并且在天平胜宝七年派遣戍边将士时，大伴家持自己也吟唱了三首以反映戍边将士离别悲痛为主题的、

---

キーワード：大伴家持 防人歌 詩の理念 民と天皇 民の悲しみ

关键词：大伴家持 防人歌 诗歌理论 庶民与天皇 庶民之悲

与戍边将士有关的和歌。家持吟唱这些和歌的缘由，被认为与始自《尚书》“诗言志，歌永言”，并在日本敕撰和歌集《古今和歌集》中形成的诗歌理论密切相关。家持抱有在此理论上设立“采诗之官”的想法，而将防人歌作为日本歌风的和歌进行收集，并基于《诗大序》提出的“上以风化下，下以风刺上”的诗歌理论，吟唱出有关戍边将士的和歌。也即是说，家持是要通过吟咏与防人歌相呼应的有关戍边将士的和歌，来实现自己所主张的诗歌理论。

## 1 はじめに

『万葉集』巻20には、天平勝宝七歳（755）に徴集された防人たちの歌が載る。防人とは九州北部の国境警備に従事した人々であり、令制のもとに東国に住んでいた農民たちが徴兵された。任期は3年とされていたが、任期を終えた後の東国への帰路の食料などは自弁であったと思われ、その負担は大きく、二度と故郷に帰ることの出来ない防人たちも多かったと推察される。これらの防人たち、及びその家族が歌う歌を「防人歌」と呼び、『万葉集』巻20に84首収録されている。防人歌には「今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つわれは」（巻20・4373）のように、一見兵士としての勇猛な心を歌う歌も見られるが、多くは故郷や家族との別離の悲しみを歌っている。このことから、防人歌の中心的主題は兵士としての勇猛な態度であるよりも、愛する者との別れを詠む悲別の文学であることが知られるのである。これらの防人歌は、当時兵部少輔であった大伴家持によって収集されたのであり、防人派遣の責任者としての任を負っていた家持が、何らかの事情によって防人たちの歌を収集し、記録したのだと考えられる。しかも、この天平勝宝七歳の防人派遣の折には、家持も自ら防人を主題とした長歌3首と短歌8首を詠んでいる。その作品の題詞は次のようにみられる。

A、追ひて、防人の別を悲しぶる心を痛みて作れる歌一首并せて短歌

（巻20・4331—4333）<sup>(1)</sup>

B、防人の情と為りて思を陳べて作れる歌一首并せて短歌

（同・4398—4400）

(1) 中西進『万葉集全訳注原文付(1)～(4)』（2009年、講談社）（初版は1978年～1983年）。『万葉集』の用例は、以下全てこれに拠る。

### C、防人の別を悲しぶる情を陳べたる歌一首并せて短歌

(同・4408—4412)

Aの題詞の「防人の別を悲しぶる心」とは、家持が捉えた防人歌の根底にある悲しみであり、その心を「痛みて作れる歌」と題することからは、家持が防人たちの別離の悲しみを理解した上で、防人たちに同情する態度であるといえる。Aの冒頭の「追ひて」とは、いわゆる「追和」に等しい態度であり<sup>(2)</sup>、Aの直前にある遠江国(巻20・4321—4327)・相模国(同・4328—4330)の防人歌に心を寄せて詠んだことを意味するであろう。

Bの題詞には「防人の情と為りて」とあり、家持が防人たちの心に成り代わり、彼らの心情を述べようとする「陳思」の歌である。これはAのように防人に心を寄せ同情する態度とは異なり、家持が我が身を防人に置き換えて、防人としての悲しみに接近しようとする試みであるといえる。Cは「防人の別を悲しぶる情」が主題であり、これはAの題詞「防人の別を悲しぶる心」と近いところにある。しかし、Cは防人の悲別の情を「陳べたる歌」であり、Aのような同情ではなく、防人の悲しみの心の在り方そのものを詳細に描こうとしているのである。そのため、Cの長歌では防人と家族の別れの場面が客観化されて描かれ、その悲しみが印象的に詠まれるのである。

大伴家持によって詠まれた三つの防人関係歌群は、以上のような主旨の中にあり、自身が収集したであろう防人歌と呼応するように詠まれているように思われる。そこには、防人歌と官人であり歌人である大伴家持個人との対峙や葛藤があり、家持は抗えない運命に置かれた防人たちに強い同情を寄せたであろうことは確かである。しかし、家持はなぜ防人及び防人歌に強い興味を持ち、自らも防人を主題とした歌を作成したのであるだろうか。そこには、大伴家の氏上としての家持の不遇の人生を重ね合わせる向きもある。従来、防人歌と家持の防人関係歌との関係については、家持が国司として越中に赴任経験があることから、故郷からの別離を強いられる防人たちとその歌に出会い、彼らへの同情から3首の歌を詠んだと理解されてきた。例えば吉井巖・山本セツ子両氏は、「防人歌群が波状をなして家持の心に吸収される、その波状にほぼ共鳴して、家持の作歌も行われている事実を知ることができる」

---

(2) 井上通泰『万葉集新考 第7』(1928年、國民圖書株式會社)、中西進『万葉集全訳注原文付(4)』(1983年、講談社)、多田一臣『万葉集全解7』(2010年、筑摩書房)

と述べ<sup>(3)</sup>、松田聡氏は対象作品A～Cを「家持の防人同情歌」とであると位置づけている<sup>(4)</sup>。しかし、官人である大伴家持の越中赴任という不遇と、東国の民の防人徴兵の辛苦が同質のものとして捉え得るかは疑問が残る。むしろ、家持には何らかの意図があつて防人歌収集及び防人関係歌を詠出したと考えるのが自然であり、林慶花氏は「家持は天平勝宝七歳防人歌蒐集にあたり、防人の悲別を主題とする歌を作ることを計画」していたと指摘するが、林論ではその意図については明確に述べられていない<sup>(5)</sup>。防人歌を収集すること、そして自身も長大な長歌を3首も残していることからすれば、そこには家持がこれらを作歌するに至る必然が存在したのだと思われる。それは後述するように、家持の目指した政治的理念の問題と大きく関わっていると推測されるからである。本稿では、この大伴家持の防人関係長歌3首から、家持が防人関係歌を詠出するに至った理由を考察してみたい。

## 2 大伴家持の防人関係歌の主題と構成

以下に、作品理解の上から、家持の防人関係歌群の3首を掲載しておきたい。

A、 追ひて、防人の別を悲しぶる心を痛みて作れる歌一首并せて短歌

1 ①天皇の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国は 敵守る 鎮の城そと 聞し  
食す 四方の国には 人多に 満ちてはあれど 鶏が鳴く 東男は 出で向  
ひ 顧みせずて 勇みたる 猛き軍卒と 勞ぎ給ひ 任せのまにまに ②  
たらちねの 母が目離れて 若草の 妻をも枕かず あらたまの 月日数  
みつ つ 蘆が散る 難波の御津に 大船に 真櫛繁貫き 朝風は 水手整へ  
夕潮に 楫引き撓り 率ひて 漕ぎゆく君は ③波の間を い行きさぐく  
み 真幸くも 早く到りて 大王の 命のまにま 大夫の 心を持ちて あり  
廻り 事し終らば 障まはず 帰り来ませと 齋瓮を 床辺にすゑて 白  
妙の 袖折り反し ぬばたまの 黒髪敷きて 長き日を 待ちかも恋ひむ  
愛しき妻らはも (巻20・4331)

2 大夫の鞆とり負ひて出でて行けば別れを惜しみ嘆きけむ妻

(巻20・4332)

(3) 吉井巖・山本セツ子「家持と防人たちとの出会い」『日本文学』20巻11号(1971年11月)

(4) 松田聡「家持の防人同情歌—一行路死人歌の系譜—」『国文学研究』109号(1993年3月)

(5) 林慶花「大伴家持の防人関係歌群考」『古代文学』40号(2000年3月)

3 鶏が鳴く東男の妻別れ悲しくありけむ年の緒長み（巻 20・4333）

B、 防人の情と為りて思を陳べて作れる歌一首并せて短歌

4 ①大君の 命畏み ②妻別れ 悲しくはあれど 大夫の 情ふり起し と  
り装ひ 門出をすれば たらちねの 母かき撫で 若草の 妻は取り付き  
平けく われは斎はむ 好去くて 早還り来と 真袖持ち 涙をのごひ む  
せひつつ 言問ひすれば ③群鳥の 出で立ちかてに 滞り 顧みしつ  
いや遠に 国を来離れ いや高に 山を越え過ぎ 蘆が散る 難波に來居  
て 夕潮に 船を浮け据ゑ 朝風に 舳向け漕がむと さもらふと わが居  
る時に 春霞 島廻に立ちて 鶴が音の 悲しく鳴けば 遙々に 家を思ひ  
出 負征矢の そよと鳴るまで 嘆きつるかも （巻 20・4398）

5 海原に霞たなびき鶴が音の悲しき宵は国辺し（巻 20・4399）

6 家おもふと寝を寝ず居れば鶴が鳴く蘆辺も見えず春の霞に

（巻 20・4400）

C、 防人の別を悲しぶる情を陳べたる歌一首并せて短歌

7 ①大王の 任のまにまに 島守に わが立ち来れば ②ははそ葉の 母の  
命は御裳の 裾 つみ挙げかき撫で ちちの実の 父の命は 栲綱の 白鬚  
の上ゆ 涙垂り 嘆き宣たばく 鹿児じもの ただ独りして 朝戸出の  
愛しきわが子 あらたまの 年の緒長く あひ見ずは 恋しくあるべし  
今日だにも 言問せむと 惜しみつつ 悲しび坐せ 若草の 妻も子ども  
も 遠近に 多に囲み居 春鳥の 声の吟ひ 白栲の 袖泣き濡らし 携は  
り 別れかてにと 引き留め 慕ひしものを ③天皇の 命畏み 玉梓の  
道に出で立ち 岡の崎 いや廻むるごとに 万度 顧みしつつ 遙遙に 別れ  
し来れば 思ふそら 安くもあらず 恋ふるそら 苦しきものを うつせ  
みの 世の人なれば たまきはる 命も知らず 海原の 畏き道を 島伝ひ  
い漕ぎ渡りて あり廻り わが来るまでに 平けく 親はいまさね 障な  
く 妻は待たせと 住吉の あが皇神に幣奉り 祈り申して 難波津に  
船を浮け据ゑ 八十楫貫き 水手整へて 朝開き わは漕ぎ出ぬと 家に  
告げこそ

（巻 20・4408）

8 家人の斎へにかあらむ平けく船出はしぬと親に申さね  
(巻 20・4409)

9 み空行く雲も使と人はいへど家裏遣らむたづき知らずも  
(巻 20・4410)

10 家裏に貝そ拾へる浜波はいやしくしくに高く寄すれど  
(巻 20・4411)

11 島蔭にわが船泊てて告げやらむ使を無みや恋ひつつ行かむ  
(巻 20・4412)

ここでは、大伴家持の防人関係歌群の理解を確認しておきたい。Aの題詞は「防人の別を悲しぶる心」とあり、家持が捉えた防人歌の基本にある悲しみが、その家族との別れにあることを示している。その心を「痛みて作れる歌」とすることからは、家持が防人たちの別離の悲しみを理解した上で、防人たちの心に同情を寄せるといふ作歌態度でAを詠んだことが知られる。このA 1の長歌の内容は、①②③の三つに区分することができる。まず第一段①は、防人の派遣が天皇の命によることを言立てし、勇ましく出立することの誓詞である。第二段②は、家族と別れ旅立っていく防人の姿の描写であり、そこには母や妻を置いて難波津へ向かう防人の姿が詠まれている。第三段③は、「真幸くも 早く到りて」や「あり廻り 事し終らば 障まはず 帰り来ませと」などとあり、防人が無事に帰ってくることを願う妻の思いが詠まれている。これに続く短歌2には防人として出立する夫との別れを惜しんで悲嘆する姿が詠まれ、3の歌では、長い間妻と離れ離れになるであろう、防人の別離の悲しみの情を詠んでいる。ここには、題詞にみるように一貫して防人とその妻の悲しみの情が詠まれており、家持は彼らの姿を第三者の立場から、その悲しみに寄り添うように歌を詠んでいるのである。このことから、①の部分は建前の言葉でしかないことが知られるのである。

家持の歌群Aの後には、駿河国(巻 20・4334—4346)・上総国(同・4347—4359)・常陸国(同・4363—4372)・下野国(同・4373—4383)・下総国(同・4384—4394)の防人歌が置かれ、歌群Bへと続いていく。

Bは題詞に「防人の情と為りて」とあるように、家持自身が防人の心になり詠んだ歌である。B 4の長歌も、A 1と同じく三段に区分することができる。ただし、①の天皇への誓詞はここでは極端に短くなり、歌の中心は②の

防人と家族の別れの場面や、③の出立した防人が何度も故郷を振り返る姿の描写がそのほとんどを占める。さらに長歌及び短歌5・6共に、故郷を離れた悲しみが、鶴の鳴き声に仮託して詠まれている。このことから、家持が捉えた「防人の情」は、決して勇猛な〈ますらを〉としての情ではなく、家族や故郷との別れをひたすらに悲しむ、一人の人間の心であることが理解されるのである。

この歌群Bの後には信濃国(巻20・4401—4403)・上野国(同・4404—4407)の防人歌があり、つづけて歌群Cが載る。Cは題詞に「防人の別を悲しぶる情を陳べたる歌」とあり、歌群A・Bを経て、家持は防人たちの根底にある心情が、悲別の情にあることを理解したのである。そのため、やはり①の天皇への誓詞は短く、②の防人と家族の別れの場面や、③の故郷に残して来た家族の無事を祈る防人の姿が詠まれている。短歌においても、防人たちの「家」に対する思慕の念が通底して詠まれるのを特徴としている。国境防衛のために旅立つ防人たちの悲しみは、その家族や故郷との別れにあるのだが、それは翻せば愛する家族や故郷との別離が悲しみであることを防人たちに発見させることになったのである。家持はまさに別れを通して見出された彼らの悲しみを、「大王の 任のまにまに」生きるしかない民の悲しみとして描いているのである。この〈民の悲しみ〉こそが家持が見つめた防人たちの真の姿であり、歌群ABCを通して描かれる防人の心が、一貫して別離の悲しみにあることが理解されるのである。

### 3 民への視点からみる家持の防人関係歌

家持が防人の悲しみに心を寄せたのは、過酷な運命を背負わされた防人たちへの同情であったという理解は誤りではない。そこに、人間として生きる悲しみを見出したこともまた事実であろう。しかし、それは大伴家持という歌人個人の文学的営為という問題で解決されるものではない。防人たちはなぜ兵役に向かう自らの悲しみを歌い、また別れに際しては家族とも歌を歌うのか。それは「歌」が悲しみの感情を表現する手段であるということのみでは、何の説明にもならないであろう。むしろ、〈民の悲しみ〉が「歌」として表出されることそのものの意義が問われなければならないのではないだろう

か。そしてそれを家持が収集し記録するという行為は、いかなる動機によって成されたのかを考える必要がある。

この大伴家持の防人歌収集及び防人関係歌の詠出について、辰巳正明氏は〈民と天皇〉とを一体として捉える古代中国の民本イデオロギー（民を主体と捉え、民の行為を天の意志とみなす思想）の視点から、古代日本の天皇と民の関係について、「古代日本の民は天皇の対として位置づけられて登場するが、家持の段階で大きな変化が現れた」として、大伴家持の応詔歌（巻19・4254—4255）が『尚書』の理念に基づいて聖天子の事績（政道）を取り上げ、天皇のあるべき政道に触れるものであることを指摘する。そして家持が防人という民へ目を向けたのは、「奈良朝の歴史には天皇が民に特別に目を向ける記事の多い」とことと関係するのであり、その背景には家持の思い描く〈民と天皇〉という理念が存在したのだと述べている<sup>(6)</sup>。辰巳氏の述べる民本イデオロギーとは、民の行為や発言が天子の徳や政治の是非をあらわすというものである。それは『尚書』（堯典）の堯帝の発言に「詩言志、歌永言、聲依永、律和聲、八音克諧、無相奪倫、神人以和」<sup>(7)</sup>とあり、詩が人々の意志を表し、歌はその志を歌うものであることを示している。同様の理解は『礼記』（楽記）にもみえ、「凡音者、生人心者也。情動於中、故形於聲。聲成文謂之音。是故治世之音安以樂、其政和。亂世之音怨以怒、其政乖。亡國之音哀以思、其民困。聲音之道、與政通矣。」<sup>(8)</sup>とある。すなわち、音は人心から発し、感情が声となり、文（あや）をなすものを樂というのであり、泰平の世の樂は安らかであるが、乱世の樂は怨みと怒りに満ちたものになるのだという。「聲音之道、與政通矣」の一文は、民の心を述べた声音、つまり民の心が歌われる詩歌がその治世と通じることをいうものであり、時の詩歌は天子の治世に対する民の声そのものであったのである。さらにこの思想は詩大序の「詩者志之所之也。在心為志、發言為詩。情動於中而形於言」<sup>(9)</sup>という著名な一文へと展開してゆくのである。まさに詩大序は「故正得失、動天地、感鬼神、莫近於詩」のだといい、詩の六義の風については「上以風化下、下以風刺上、主文而譎諫。言之者無罪、聞之者足以戒。故曰風」といい、それは「上」（天子）が「下」（民）を風化し、下が上を風刺することなのだという。この詩の

(6) 辰巳正明「真の男らしさとは一民と天皇」『詩靈論一人はなぜ詩に感動するのか』(2004年、笠間書院)

(7) 『尚書』は池田末利『全釈漢文大系第11巻 尚書』(1976年、集英社)に拠る。

(8) 『礼記』は市原亨吉『全釈漢文大系第13巻 礼記(中)』(1976年、集英社)に拠る。

(9) 『毛詩』大序は小尾郊一『全釈漢文大系第31巻 文選(文章編)6』(1974年、集英社)に拠る。

理念は古代日本にも受容され、『古今集』の真名序へも引き継がれており、「感生於志、詠形於言。是以逸者其声楽、怨者其吟悲。可以述懐、可以發憤。動天地、感鬼神、化人倫、和夫婦、莫宜於和哥」<sup>(10)</sup>とある。これは先にみた古代中国の詩や楽の思想と等しく、歌が人心に根ざすものであり、歌によって民の心が測られ、歌を以て神人が和合するのだということである。

以上のように、民の声である詩歌はその天子の徳や政道の是非をあらわすものとして理解された。歌は天地神人を和合させる力があるという『尚書』に発したこの思想は、古代中国の多くの文献に記され、また日本の勅撰和歌集をも成立させる概念として展開した。『尚書』や『毛詩』が養老令の学令にみえることから、家持が学んだところの古典であったと思われる。さらに天平勝宝七歳には兵部少輔としての任務に着き、防人たちとの出会いによって、そこに民の悲しみの声としての防人歌が実感として理解されたのであろう。この家持の防人歌収集について注目されるのが、『漢書』芸文志の「書曰『詩言志、歌詠言。』故哀樂之心感、而歌詠之聲發。誦其言謂之詩、詠其聲謂之歌。故古有采詩之官、王者所以觀風俗、知得失、自考正也。」<sup>(11)</sup>である。ここには『尚書』堯典の「詩言志、歌永言」を引用し、詩歌と声楽の効用を論じている。注目すべきことは、古の「采詩之官」についての記述であり、天子は国の風俗を見て自らの得失を知り、その考えを正すのだという。この「采詩之官」が収集したのは〈風〉の歌であり、先の詩大序に「上以風化下、下以風刺上」とあったように、諷刺としてあらわれる民の声であった。

最も重要な歌謡は、『詩経』の国風歌謡である。この国風の中には、防人と同様に兵役に従事する者たちについて歌われた歌謡が存在する。次の「陟岵」（魏風）はその代表的な歌謡である。

陟彼岵兮、瞻望父兮

父曰嗟、予子行役、夙夜無已

上慎旃哉、猶來無止

(彼の岵に陟りて 父を瞻望す／父は曰ん 嗟 予が子よ 役に行きて  
は夙夜已むこと無かれ／上はくは旃を慎しめや 猶ほ來れ 止まること  
と無かれ)

陟彼岵兮、瞻望母兮

(10)『古今和歌集』は『新編日本古典文学全集 11 古今和歌集』(1994、小学館)に拠る。

(11)『漢書』は『漢書』(中華書局／中国)に拠る。

母曰嗟、予季行役、夙夜無寐

上慎旃哉、猶來無棄

(彼の妃に陟りて 母を瞻望す／母は曰ん 嗟 予が季よ 役に行きて  
夙夜寐ぬること無かれ／上はくは旃を慎しめや 猶ほ來れ 棄てらる  
ること無かれ)

陟彼岡兮、瞻望兄兮

兄曰嗟、予弟行役、夙夜必偕

上慎旃哉、猶來無死

(彼の岡に陟りて 兄を瞻望す／兄曰ん 嗟 予が弟よ 役に行きて夙  
夜必ず偕にせよ／上はくは旃を慎しめや 猶ほ來れ 死すること無か  
れ)<sup>(12)</sup>

『詩序』は「陟岵孝子行役思念父母也、國迫而數侵削乎大國、父母兄弟離散而作是詩也。〔陟岵は孝子、役に行き、父母を思念するなり。国、小伯にしてしばしば侵削せられ大國に役せらる。父母兄弟離散して是の詩を作るなり〕<sup>(13)</sup>といい、兵役に出た者が家族を思慕する気持ちを詠んだもので、出兵によって強いられた別離の悲しみが主題となっていることを指摘する。朱熹の『集伝』はこれを「賦」であるとしており<sup>(14)</sup>、感情を直接に表現している詩として理解している。この詩の内容は、家族の別れの場面が具体的に詠まれていて、第一連では兵士の父が、戦役に行ったからには一所懸命に勤めよと言いながらも、帰らぬことがないようにと声をかけ、第二連では兵士の母が、戦役に勤めよと言いながら、死んで捨てられることがないように、必ず帰りなさいと声をかけ、第三連では兵士の兄が、戦役中は朝夕仲間と一緒にいなさいといい、決して死ぬことが無いようにと声をかける。つまり「陟岵」の詩は、戦役に出る父母や兄が兵士としての勤めを果たすようにといいながらも、その本心は無事に帰ってくることを強く願っているのである。

先にみた詩大序が「上以風化下、下以風刺上」と述べたように、この風の詩に兵士の家族との生別離の悲しみが詠まれていることは、民の苦しみの声があらわされていることを意味する。兵役を科せられた兵士と家族の別れの詩が風の詩として存在することは、防人たちが家族との別れの悲しみを歌っ

(12)『詩経』は石川忠久『新釈漢文大系第110巻 詩経(上)』(1997年、明治書院)に拠る。

(13)『標点本十三経注疏』(北京大学出版／中国)

(14)吹野安他『朱熹詩集伝全註釈(1)』(1996年、明德出版社)

ていることと軌を一にする。まさに、防人歌の悲別の情は「陟岵」の如き風の歌としての意味を持ち、家持は「采詩之官」としての意識から、彼らの悲別の歌を収集したのだといえるのである。そして家持は、風の歌である防人歌を通して〈民の悲しみ〉を理解し、それを自らの歌で表現したのである。

ここで家持の防人関係歌群に立ち返ってみれば、歌群AとBには防人の母と妻、Cには父母と妻子が詠まれ、家持の防人関係歌群の全てに防人の家族が登場していることから、ABCの主題が防人の家族との別れにあることは明確である。A1には「大王の 命のまにま 大夫の 心を持ちて あり廻り 事し終らば 障まはず 帰り来ませと」と、夫の無事の帰りを待ち続ける妻の姿があり、それは「防人の別を悲しぶる心」を、夫を待つ妻の姿を通して描いている。さらに、その別れが「大王の 命のまにま」のやむなき別離でありながら、「大夫の 心を持ちて」兵役へ赴くという相反する態度の中に、抗えない運命に立ち向かう防人の悲愴な姿がある。B4には、「妻別れ 悲しくはあれど 大夫の 情ふり起し とり装ひ 門出をすれば」と、妻との別れの悲しみを振り切って出立しようとする防人の葛藤がある。しかし、故郷を離れては「鶴が音の 悲しく鳴けば 遙々に 家を思ひ出 負征矢の そよと鳴るまで 嘆きつるかも」と、故郷とその家族を思っていよいよ嘆きは激しくなるのだという。これが「防人の情と為りて」詠んだ歌であることから、家持は防人の心と一体となって作歌しているのであり、歌群Aの客観的視点とは異なる主観的視点からの詠出であるといえる。Cは、ABよりもさらに家族との別れが具体的に詠まれ、難波津に向かう道中で幾度も故郷と家族を思い返している。さらに、「あり廻り わが来るまでに 平けく 親はいまさね 障なく 妻は待たせと 住吉の あが皇神に 幣奉り 祈り申して」と、ここでは自らが「皇神」に家族の無事を祈念するのだという。その根底にあるのは「うつせみの世の人なれば たまきはる 命も知らず」という、いつ死ぬともしれない旅に出る自らの運命への自覚にある。この死をも覚悟しなければならない別れの情こそが、「防人の別を悲しぶる情」であったのだといえる。

このように、ABCは〈防人たちの悲別の情〉を主題としながら、それぞれ異なる視点から詠まれていることが理解される。それは家持が目の当たりにした防人たちの運命を、あらゆる角度から描くことを意図したためであるといえる。家持が三様の悲別の情を詠んだのは、まさに民の悲しみの心をより深く理解するためであった。

ではなぜ家持は、こうした防人関係歌を詠んでまで〈民の悲しみ〉を理解しなければならなかったのか。先に論じてきたように家持の防人関係歌は、古代中国の詩の理念に基づいて詠まれた歌である。その詩の理念において風の詩歌とは、「上以風化下、下以風刺上」という関係性の中に成立しなければならない。家持が「采詩之官」として集めた防人歌は「下以風刺上」という理念に準ずる風の歌である。この詩大序の説く詩の理念に従うならば、「下」の風刺の声に「上」は応える必要がある。本来ならば、この「上」は天皇でなければならない。しかし、大伴家持によって防人歌と呼応する防人関係歌が詠まれていることからすれば、家持の防人関係歌とは「上以風化下」という詩の理念に沿って、〈民の悲しみ〉の声を理解し受け止めるために詠出されたと考えざるを得ないであろう。

## 4 おわりに

大伴家持の防人関係歌は、「大王の 任のまにまに」生きるしかない防人たちが歌う防人歌と呼応する歌である。歌の主題は故郷や家族との別離の悲しみであり、家持はその悲しみを、Aでは「心を痛みて」同情し、Bでは「防人の情と為りて」陳思する。そしてA・Bを経た後のCで家持は、防人たちの根底にある心情が悲別の情にあることを理解したのである。

家持が防人たちの別離の悲しみにこだわることの理由は、大伴家持という歌人個人の文学的営為という問題のみで解決されるものではない。その基盤には『尚書』の「詩言志、歌永言」を始発とする古代中国の詩の理念があると考えられる。この詩の理念は、古代中国の多くの文献に記され、また日本においては『古今和歌集』という勅撰和歌集を成立させる概念として展開した。家持はこの理念に基づいて生まれた「采詩之官」を意識して、防人歌を日本の風の歌として収集したのである。

風の詩歌について詩大序は「上以風化下、下以風刺上」と説き、これに倣えば防人歌とは「下」が「上」を諷刺する〈民の悲しみ〉の歌である。詩大序が示す詩の理念に従えば、「上」は「下」の風の声に応えなければならず、本来ならば日本における「上」とは天皇である。しかし、現存するのは大伴家持の防人関係歌であり、翻って考えるならば、家持の防人関係歌は「上以風化下、下以風刺上」という理念に準じて、〈民の悲しみ〉の声に呼応した

歌として理解されよう。

すなわち大伴家持の防人関係歌とは、家持が古代中国に発した詩の理念を達成するために詠出された、〈民の悲しみ〉の声に応答する歌なのである。

